

### 〈参考文献〉

- 建築知識別冊ハンディ版(7～8月号) GRAFFITI、60年代の幕開けを語る用語。(P98、(株)建知出版)
- 1978年UIFAのパンフレット。
- 1984年UIFA、ベルリンのパンフレット。
- 1976年イラン、1979年シアトル、1983年パリの開催通知。
- ベルリンの案内小冊誌。(ベルリン市観光局発行)

なお、上記以外に以下の方々にご協力をいただきました。

中原 暢子氏 (林、山田、中原設計同人)

山田 初江氏 (林、山田、中原設計同人)

飯島 静江氏 (日建設計)

山田 規矩子氏 (鹿島建設)

まだ壊れたままの建物が、かなり残っている。戦争が終わって40年も立とうとしているのに……。あと何年かかって昔どりの街にするのかわからないが、もとにもどった時には、街全体が博物館の役目をし、素晴らしい景観が広がると思う。

特に、東ドイツは国をあげて、歴史的建造物や遺産を大切にしているのが、旅行者にもひしひしと伝わってくる。

ドレスデン〈写真⑧〉はドイツのフィレンツェといわれるほど美しく、歴史的遺産の多い都市である。ここも、第二次世界大戦でほとんど破壊されたが、着々と復興させている。

ドレスデンのエルベ河のほとりに、古い建物を修復しながら両翼に新しい建物をつないで、ホテル(ホテル・ベルビュウ)〈写真⑨〉にする工事を見学させてもらった。古い建物の客室になる白いしっくい壁の腰に、若い画学生が昔あったのと同じ模様を丹念に描き込んでいたのに驚かされた。

新しい建物の方は日本の鹿島建設が請負って建設中であった。ちょうど、和食堂の内装工事に日本の職人6人が入って仕事をしているところであった。

日本の建設会社は東ドイツにまで進出しているのである。

ドレスデンの近くにあるマイセンは有田と姉妹都市で、日本の陶芸の影響が強烈に残っている。そんなこともあってか、東ドイツでは非常に日本人に好意的であった。

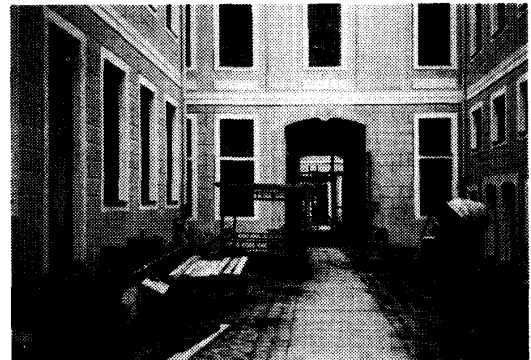
## § おわりに

ベルリン、東ドイツのポツダム、ドレスデン、マイセンなどの街では、それぞれの都市の歴史や伝統を捨てず、その土地の自然環境を壊さずに、時間をかけて、昔のままの建造物を復興させていた。私はその根気強さと文化遺産を大切にする国民性に大変感動した。

日本では東ドイツの都市計画とは反対の方向に進んでいる。特に都市の開発や再開発になると古い建造物を壊し、自然を破壊して行なうのがあたりまえになっている。こんな開発の仕方では日本の住まいとその住環境はいつまでもよくなるような気がする。



〈写真⑧〉



〈写真⑨〉

に、手入れがほどこされているのである。新しい現代的な教会はその壊れた建物の脇に建てられている。日本ならすべて新しいものに建て替えてしまうと思うが、ドイツ人の戦争を忘れないという執念の強さに驚き、日本人との違いをはっきりと認識させられたのである。

西ベルリンでは以前、労働者不足から、トルコ人労働者を多数受け入れたが、現在、ダウンタウンがトルコ人街になりつつあり、社会問題になっている。特に、空襲で完全に壊れなかったが、老朽化した建物に住んで生活しているトルコ人が増えている。これらの建物はレンガで造られているため、外壁<写真⑤>はがっちりしているが、内側の設備類<写真⑥、写真⑦>が使えなくなっていたり、危険な状態であったり、問題が多くなっている。そのため、内側を全面改修して、婦人センターやトルコ人達への教育施設などの公共的建物に改造する計画が盛んに行なわれている。また、これらの建物は中庭を囲んでいるため、中庭の利用も積極的に考えられている。

新しい計画の中で集合住宅もどんどん建てられている。欧米では日本のように建物が南向きでなくてはならないという考えがないので、道路沿いに敷地を囲むように建て、大きく中庭を取り、木を植えたり、遊び場を取っているケースが多く見られた。

### § 東ドイツの都市について

東ベルリンへは有名なチェックポイントであるチャーリーという検門所から入国する。まず、西側の開きっぱなしの遮断機をぬけて30mの緩衝地帯を抜けると1回目の電動遮断機がある。次にジクザグに動くように障害物がおかれ、ようよう検門所にたどりつく。そこでパスポートの検査が行なわれる。40分以上も待たされ、10m先に2回目の電動遮断機があり、東側に入るようになっている。このチェックポイントの西から東までの距離は約100m強ある。

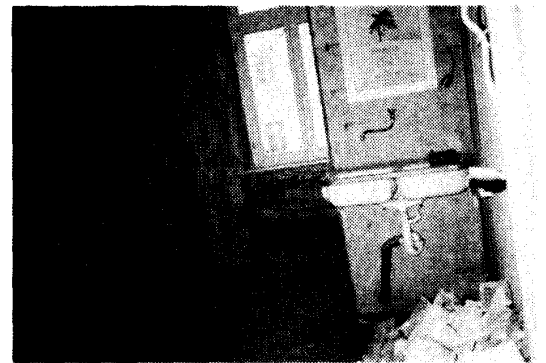
東ベルリンの検門所に近い建物の窓は、全部レンガでふさがれ、西側が見えないようになっていた。

ベルリンの壁は全長45kmにわたって、東西を分断している。壁の高さは約4～5m、厚さは2mぐらいあるように見えた。

東ベルリンに入るとがらっと車の数や人が減る。第二次世界大戦で爆撃された建物を、全く昔のまま再建したり、修復したりしているのに驚かされた。現在も修復中の足場のかかった建物や、



<写真⑤>



<写真⑥>



<写真⑦>

IBAで実現しようとしていることは「ベルリンの住環境をよくするために、古い建物の再開発」、「新しい集合住宅の建設」、「河に分断されて、残された部分の開発」などである。

それにしても、住まいや建築物に対して、市民の関心が非常に高いことに驚き、これではなければ住環境はよくなるまいだろうと思った次第である。

## § 大会における女性建築家の印象

講演内容で都市計画関係の実践や研究が多くなり、欧米では女性がこの分野に進出したことを強く印象づけられた。今まで、男性の手の中にあった都市計画を、生活者としての経験を生かしたアイデアを多く入れて行かなければ、心のかよった、使いよい都市にはならないので、女性の計画者が必要になるのは当然である。

アメリカ人の講演で、環境を記号化する試みなども、世界的に記号論が流行している一つの現れとして、大変面白いと思った。

細かいことだが、講演会で日本人はきめられた時間の20分内できっちりと終わらせるが、外国勢はあまり時間を気にせず、議長から注意を受けても無視して、しゃべる者が少なからずいた。聴衆は講演内容に興味を持つと、講演者を追いかけて、さらに詳しく知ろうという積極性がある。中国からの代表二人は非常に積極的に色々な国の人に話しかけて、交流をはかっていた。

## § 開催地(ベルリン)の現状と建築事情

西ベルリンは東ドイツに囲まれた陸の孤島である。我々は日本からフランクフルトで飛行機を乗りかえて西ベルリンに入った。他に列車や車で入ることも出来る。

街は大変緑が多く、大きな公園が方々にひろがっている。車は多いが、街は静かな印象を受けた。道が広いうえに、高い建物が少ないので、空が広く見え、街を歩いても圧迫感がない。かつて、ベルリンはほとんど街が破壊されたため、中心街で現在建っている建物は東京でよく見られるようなガラスを多く使った現代建築である。これらは有名建築家の設計の建造物が多い。一つだけ見ていると素晴らしいのだが、街の中の古い建物と較べると、薄っぺらで、薄汚れた感じがしてならなかった。それに反し、屋根勾配を持った古い建物はどっしりと大地に根づいた落ち着きと風格がある。そのうえ、非常に家庭的で暖かな感じを受けたのは私だけだろうか。

西ベルリンでは日本代表が滞在したホテルと大会の会場(ベルリン工科大学)の間を時には歩き、時には地下鉄(2駅)に乗って、行来をした。地下鉄網は非常に発達している。地下鉄には改札がない。ただ乗りもできるが、見つかると罰金が大変とのことであった。

我々の滞ったホテルに近い動物園駅のそばに、カイザーヴィルヘルム記念教会(写真④)がある。この教会はゴシック建築であったが、第二次世界大戦の折、爆撃を受け、その破壊されたままの姿で、現在も残されている。しかも、壊れた形をくずさないよう



〈写真④〉

貢献度」、③「建築原論とその貢献度・建築気質(法則・技術)」、④「建築理念の提案」、⑤「女性建築家の歴史からの発見」。

ベルリン工科大学の数学学部校舎<写真①>で10月10日～14日まで、展示会<写真②>は10月11日～30日まで開催された。

開会式<写真③>にはベルリン工科大学長、建築住宅局長クラウス・フンケ、建設住宅省ベルリン建築住宅局ウーテテオドーラ・ヤガール女史が出席された。

参加国は47ヵ国、参加者は250人、パネル展示は80枚であった。

日本からは飯島静江(日建設計)、船津貴子(住宅・都市整備公団)、山田規矩子(鹿島建設)、松川淳子(生活構造研究所)、日高たか子(日高たか子建築設計事務所)、西川加彌(広島工業大学)、中岡真由美(九段建築研究所)、川嶋幸江(共栄学園短期大学)の計8名が参加した。

日本の講演は「多摩ニュータウンのハウジング」船津貴子、「コンピューターグラフィックスを利用した景観シュミレーション」飯島静江が行なった。

パネルは「ハウジングプラン — 多摩ニュータウン」(船津貴子)、「NEO JAPANESE POWER CONDENSER」(中岡真由美)、「婦人差別撤廃条約早期批准要望書について」(山田規矩子)の3人が展示した。

10月14日は全員でベルリンの郊外のポツダム(東ドイツ)へ。

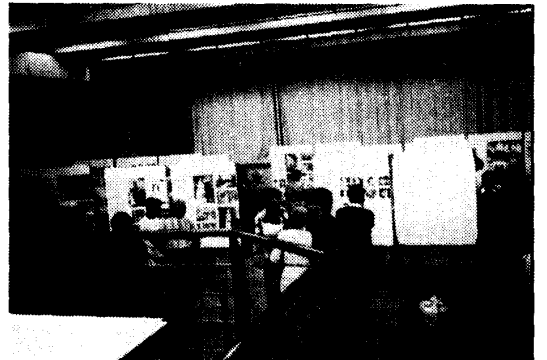
10月15日～16日まで、飯島、日高、川嶋と他の国の14人と一緒にバスで東ドイツのドレスデンとマイセンへ。10月15日～21日まで、船津、山田、中岡がニュールンベルグ、ミュンヘン、シュトゥットガルト、フランクフルトの西ドイツの各都市を各国の人たち12人と一緒に見学。

第7回のベルリン大会はドイツ連邦共和国大統領 Richard Von Weizsäcker 博士の後援のもとに、International Building Exhibition (IBA) の組織の中で行なわれた。

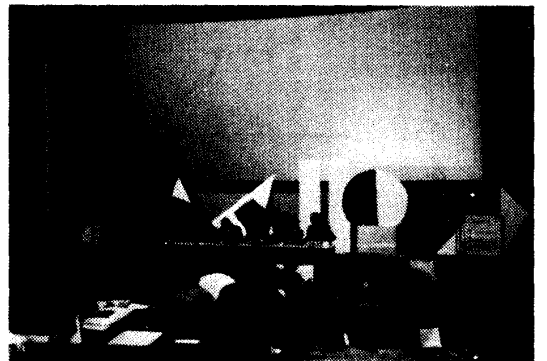
IBAは、1987年にベルリン市開設750周年記念祭を行なうための組織である。1984年はその記念祭の先がけとして、レポートイヤーになっていた。そのため、建築に関する展覧会、会議、シンポジウム、映画などがベルリン市内のあちこちで開催されていた。UIFAもこの計画の一部であった。



<写真①>



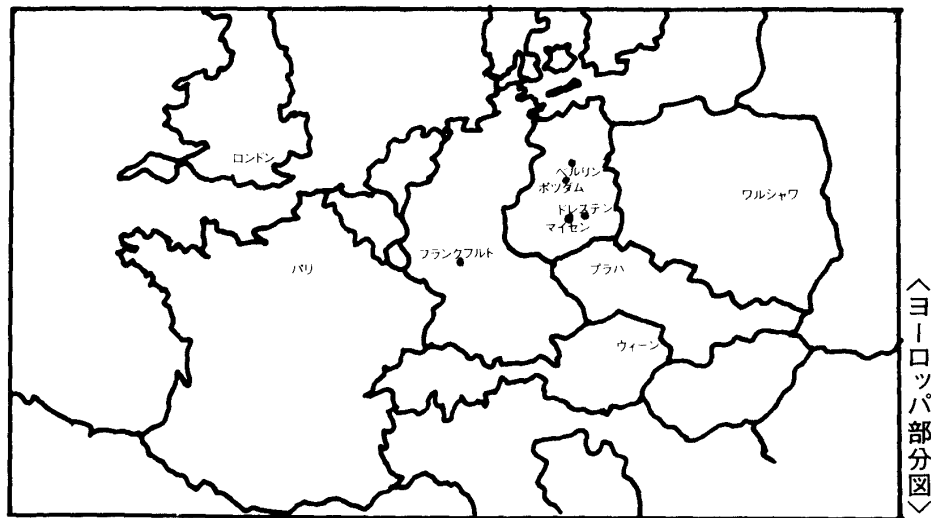
<写真②>



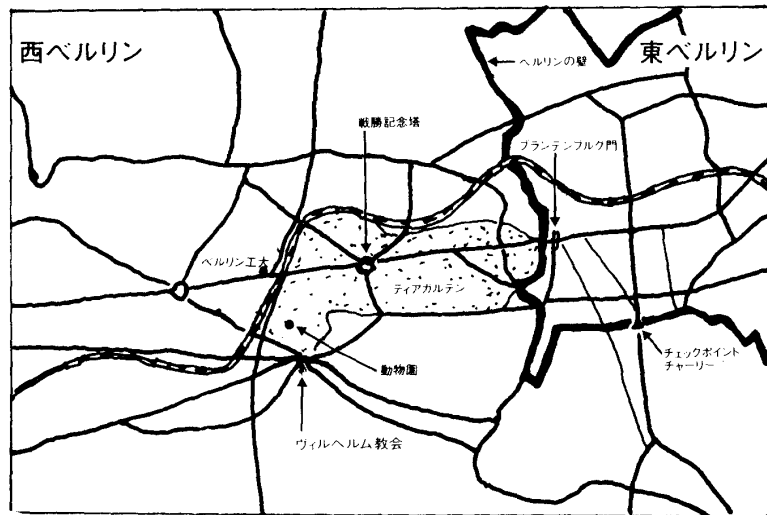
<写真③>

作品展では「東京建築士会女性建築士分科会発足式」(郡 正子、村上美奈子、山田規矩子)、「津山口保育園」(小川信子ほか)、「由田学園幼稚園」(吉田あこ)、「松ぼっくり保育園」(佐々和子)、「①生活構造研究所組織図、②子供科学博物館、コンピューター・コミュニケート図、③子供の空間構成、④壁、床、天井装飾ほか」(計4枚、土田淳子)のパネル全8枚を展示した。研究発表第2日目の午後の部の議長に土田淳子になった。

大会後、5月1日～5日までロアール河沿いの古城の見学が行なわれた。これには飯島、山田が参加した。その他のメンバーは、フランス、スイスなどの教育施設及び住宅団地の見学を行なった。



△ヨーロッパ部分図▽



△ベルリン周辺図▽

1984年 第7回UIFA世界大会と作品展がベルリンで開催された。〈地図参照〉

内容は「女性建築家の歴史 — 20Cにおける女性建築家とデザイナーの歴史」。これは、初めての重要な展望である。

テーマは ①「すまいと居住環境」(衛星都市と自然発生都市の質の比較、自助住宅プロジェクトと住民参加協同プロジェクト、女性による女性のためのデザインプロジェクト、老人のための住まい、自然建物、歴史的建物の再利用計画)、②「各国における計画手法とその

れた。引き続き6週間、ロスアンジェルスLos AngelesのOWAで展示された。

内容は「変化する資源のための新しいデザインの概念」、「増加する人口で、変化する人々の考え方をふまえながら、街と建物は新しい管理のもとで発展させる」。

講演は「ヨーロッパから学ぶこと」Renata V. Tscharner (アメリカ)、「環境工学におけるコンピュータ技術の役割」飯島静江(日本)、「ルーマニアでの木造教会の復原」Mariana Angelescu (ルーマニア)が行なった。

開会式及び歓迎会にはJimmy Carter アメリカ大統領の代理として、住宅省からDonna-shalala女氏、UIA会長Louisde Moll、AIA会長Mr. Ehrmanm、AIA副会長Anna Halpinの出席のもとにシアトルのオリンピックホテルで開催された。53カ国の代表が参加した。

日本からは飯島静江(日建設計)、船津貴子(日本住宅公団)が参加した。

会議後、10月5日～19日まで西海岸視察のため、シアトル、ポートランド、サンフランシスコ、モントレー、サンタバーバラ、ロスアンジェルスLos Angelesの都市を見学した。

論文概要集は会議終了後、発刊される予定。

1979年 第1回ベルリンでのUIFAの準備会が開催された。

内容は「建築と都市計画における女性」で、UIFAについての情報と招待者が種々の女性グループについて講演をする。

西ドイツとオランダから80人～100人がUIFAベルリン部会に参加した。

1981年 第2回ベルリンでのUIFAの準備会が開催された。

デンマークとアメリカからの講演者と一緒に「住環境の設計における居住者のかかわり方」を考える。

IBAと連邦計画建設省と共催でUIFAのベルリン部会を開き、西ドイツ、デンマーク、アメリカから80人～100人の参加者があった。

1983年 第6回UIFA世界大会と作品展がパリで開催された。この大会はUIFA創立20周年大会である。

内容は「小さな子どものための建物と環境」であった。

後援は婦人権利省大臣 Yvette Roudy、都市計画住宅省大臣 M. Roger Quilliot、パリ市長 M. Jacques Chirac で、開会式に参加された。

大会は4月26日～30日まで、パリ市のパレ・デ・コングレで行なわれた。

参加国は47カ国、260人の参加をみた。

日本からは吉田あこ(内藤建築事務所)、小川信子(日本女子大学)、飯島静江(日建設計)、山田規矩子(鹿島建設)、土田(松川)淳子(生活構造研究所)、船津貴子(住宅・都市整備公団)、佐々和子(アトリエあい)、梶島邦江(早稲田大学大学院)、奥田宣子(日本女子大学大学院)、の計9名が参加した。

日本の講演は「保育所・平面計画設計」小川信子、「人間工学的研究 ①幼児坐位と便器の開発、②保母腰痛と沐浴槽の設計」吉田あこ、「教育環境と防音計画」飯島静江の三氏がスライドをまじえて行った。また、「日本における婦人建築家の活動と実態」(吉田あこ、村上美奈子、郡正子)の小冊子を配布した。

パリから個人的に参加し、日本からの代表は出席しなかった。

1972年 第3回UIFA世界大会と作品展がルーマニアのブカレストで開催された。

内容は「新しい都市空間の人間化における女性建築家のアイデアと協同作業」。

講演は①「ポーランド女性建築家が直面した都市空間の人間化」Lewicka Hanna(ポーランド)、②「歴史的かつ人気のある記念碑の保存について」Gazda Aniko(ハンガリー)、③「コミュニケーション」Tchmoutina Natalia(ソ連)、④「我が街における生活の質とリサーチ、それに対する調査の可能性」Brodner 博士(ドイツ)、⑤「古い市街地と新しい空間における運搬の問題」講演者氏名不明(イタリア)。

後援会はルーマニアのM. Ceausescu大統領、歓迎会はブカレストのシティーホールでルーマニアの建築家協会主催で開かれた。

28ヵ国の婦人建築家が参加した。

日本人は出席しなかった。

1976年 第4回UIFA世界大会と作品展がイランのカスピ海沿岸のラムザールで10月13日～16日まで開催された。

内容の主題は「建築における文化的同一性」。副題は a) 古い共同体から発展する新しい都市機構への統合とその履行、b) 発展途上の共同体の文化的衝撃、c) 攻撃というよりもむしろ緩和に基づく建築の形成、d) 文化的同一性を表現する手段としての我々の歴史的な地域の保存。

開会式と歓迎会にUIFA名誉会長のイラン王妃、イラン政府とテヘランの住宅大臣の出席のもとにラムザールホテルで開催された。

日本からは副会長の中原暢子(林、山田、中原設計同人)、山田初江(林、山田、中原設計同人)、林 雅子(林、山田、中原設計同人)、林 昌二(日建設計)、武田満す(日本女子大学)、飯島静江(日建設計)、白井正子(青木豊建築事務所)、峯 成子(建設省建築研究所)、船津貴子(日本住宅公団)、平井美蔓(アトリエM・H)、山田規矩子(鹿島建設)、真尾怜子(ツカサ装備工業)、大高真紀子(芸大大学院)、川嶋幸江(すかいパス事務所)、の計14人が参加した。

日本人の講演は中原暢子が「日本の住宅事情について」を自身のスライドをまじえながら行った。

作品展には中原、山田、林が自身の作品のパネルを、白井は構造関係の作品のパネルを出展した。パネルは1m四方の大きさに統一されていた。

大会の後、10月17日～29日までイラン国内の視察旅行がバスで行なわれた。見学した都市はハマダン、イスファファン、ペルセポリス、シラーズ、テヘランであった。

1978年 UIFA作品展がパリのポンピドーセンターで9月13日～10月16日まで開催された。

特に定まったテーマはなかった。展覧会の歓迎会はパリのシティーホールで、パリ市長、Jacques Chirac氏の出席の下に行なわれた。23ヵ国、80人の女性建築家が参加した。

日本からは山田規矩子(鹿島建設)が参加した。

作品展には山田が「工場建築」に関連したパネル4枚を展示した。

1979年 第5回UIFA世界大会と作品展がアメリカのシアトルで9月30日～10月4日まで開催さ



家同志の親睦と情報交換、であった。

当時、この会は世界的に女性建築家の数も少なく、差別を強く感じていたことが引き金となり、会長の個人的な考えで出発したのである。そのため、初めは学術的な会ではなかったが、20年を過ぎた今日では、世界的に女性建築家の数も増し、学問、研究分野への進出も多く、年々、研究発表が増え、1979年のシアトル大会あたりから、体質が変化しはじめている。それは、女性建築家の数が増えたことにもよるが、それぞれの国で活躍の場が広がったこと、人口の半分を占める女性の立場からの提案によって、より人間にそったデザインが出来、奇をてらわず、堅実であること、住まいの中での日常生活の使い勝手をよく知っていること、など、男性の眼に届かない場所での様々な発想の展開が、仕事の間をひろげてきたものと考えられる。

〈注1〉 **PODOKO** — エスペラント語で、考える、話し合う、そして創る、**PENSEDO**、**DISKUTEDO**、**KREEDO**、の意味。エスペラント語は略すとき、それぞれの頭文字に名詞語尾のOをつけるため“**PODOKO**”となった。

この三つを繰り返し、繰り返し、私たちの会は進んでいくというものである。

現在、ポドコは表立った活動は休止中である。

## § UIFAの歴史

1963年 UIFA創立。

1963年 第1回UIFA世界大会及び女性建築家の第1回国際作品展がパリで開催された。

会議の内容は「世界の女性建築家」「女性によって創られた現代都市と集合住宅」。

Winter Efinger 博士 (FRGの住宅省代表)による講演。

この会には1914年に学位をとったイギリスの最初の女性建築家 Mrs. Hughes が出席した。

開会式はパリのシティホールで行なわれ、建設大臣 M. Maziol、文化省大臣 M. André Malraux、フランス建築家協会会長 M. Durrause が出席された。

第1回大会に、イランのファラ王妃よりUIFAへ多額の寄付があった。王妃の代理として当時のイラン首相令嬢が出席した。

この大会には35ヵ国が参加した。

歓迎会はセーヌ河に豪華な船を浮かべ、花火をあげるなど、非常に華やかなものであった。

中原暢子は作品展に自身の作品と林、山田設計同人のメンバーの作品を展示した。他の国でも、個人や国がしている仕事を発表したり、展示したりした。

5日間の大会終了後、ロワール河沿いの視察旅行が2週間行なわれた。

1969年 第2回UIFA世界大会と国際作品展がモナコで開催された。

会議の内容は「新しい街づくりにおける女性建築家のかかわり方」。

開会式には後援者であるモナコ王妃の Grace Kelly、Francois-Didier Gregh 秘書官、Raoul Biancheri 公共土木事業団顧問、Mr. Rovarine 建築家協会会長が出席した。

この大会には140人の女性建築家が参加した。

第2回は早間玲子(前川国男建築設計事務所、現在 Cabinet Reiko Hayama、在パリ)が

# UIFA (国際婦人建築家協会)の歴史と その最近の大会について

The history of UIFA and a report of the 7th Congress at Berlin

生活学科住居学専攻

川 嶋 幸 江

## § はじめに

UNION INTERNATIONALE DES FEMMES ARCHITECTES (UIFA) は、フランスの女性建築家 S. D. Herbez De La Tour が世界の女性建築家に呼びかけて、1963年に組織され、同時にパリで初めての世界大会を開催した。この公式の案内は日本の建築家協会宛に届けられ、当時、紅一点の会員であった中原暢子(林、山田、中原設計同人)に話があり、小林(草野)知恵子(広瀬建築事務所)と一緒に、日本代表で参加した。

日本では終戦後、男女平等の教育により、女性も建築の勉強ができるようになってはいたが、男性中心の世界であった。そのため、建築を学んだ女性たちが集まって「ポドコ」(注1)という女性建築技術者の会を1953年9月に結成していた。中原、小林はその代表も兼ねて日本を出発した。

1963年の日本では外貨の持ち出しが一人500\$であった。両氏は船で1ヵ月かかってパリに到着した。パリでは日本大学建築科を卒業し、パリに留学中であった林のり子がオブザーバーという形で参加した。

第1回の大会で各国の代表たちは、日本が50名の会員を持った「ポドコ」を組織していることを知って大変驚き、同時にすっかり尊敬され、日本の女性の株が急上昇したのである。

この第1回の大会で、UIFAの提唱者である、De La Tourが会長にきまった。役員は次の通りである。第一副会長 Eva Spiro(ハンガリー)、事務総長 Jean Young(アメリカ)、会計 Raoul Chenevert(カナダ)、副会長 Regnolio Cavanna(イタリア)、Jane Hastings(アメリカ)、Shoshona Madjar(イスラエル)、Dada Marquis(アフリカ)、中原暢子(日本)、Indira Rai(インド)、Bola Sobande(ナイジェリア)、Cynthia Wood(イギリス)、で構成されている。

加盟国は57ヵ国である。

この会の目的は、①女性建築家の地位の向上、②女性建築家の仕事の確保、③世界の女性建築